



安藤美文

出会いが人生を
豊かにする

人生を 舞う

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

口絵省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

出会いが人生を
豊かにする

人生を 舞う



安藤美文

人生を舞う

出会いが人生を豊かにする◎目次◎

推薦のことば 7

はじめに 14

細川さんとの出会い 18

大阪保存会の発足 22

初公演 30

石見神楽いわみを売り出す 32

祇園祭初舞台 40

出合い様々 45

仕事の話 49

社中解散と復活 52

海外公演・序 56

初めての中国 59

石見神楽大陸に舞う 67

中国再訪 73

郷土愛 81

石見神楽の魅力 85

神楽社中 93

テレビ番組が最優秀賞に 95

波野村との出会いと交流 99

三十時間ぶつ通しマラソン神楽大会 115

石見神楽ベトナムへ 120

歌をキーワードに都市交流 138

対談 町おこし、あれこれ 160

推薦のことば

京都島根県人会会長 東寺 代表役員

砂原 秀遍

このたび、安藤美文氏の著書である『人生を舞う』が、文芸社より刊行になるとのことで、改めて前著を拜読させていただきました。

感動しながら一気に読んでしまい、この文を書き進めております。

真宗のお寺で出生せられお育ちになられたのだと知り、改めて氏の温かいお人柄にうなずくものがあり納得いたしました。

大学では法科に入られ、就職先は科学技術の最先端をいく会社であり、埃にまみれながらも人集めに率先せられ、友を作られました。その間に大好きな故郷の神楽を同好の士とともに楽しく学ばれ、今年で三十二回目となる京都祇園

祭の八坂神社への奉納を初めとし、各地で実演される等、実践の人とも申し上げる事ができるようです。いや、精進でしようか。私の属する寺の開祖弘法大師は、世界で初めて私学をつくり、民間人を迎えて人づくりをしたことで知られていますが、

「物の興廢は安からず人に由る。人の消沈は定めて道に在り」と述べております。その精神を受け継ぐ学校を持っていますが、その校訓は左の如くです。

一、自己を尊重せよ（仏）

一、真理を探求せよ（法）

一、社会に献身せよ（僧）

思えば、安藤美文氏の実践行というか精進行は右の如くではないでしょうか。安藤氏がその人であると実感したところであります。

本書を大勢の方々には是非ともお読みいただきたく、粗文を認めました。したた

真田家第十四代当主 慶應義塾大学理工学部助教授（工学博士）

真田 幸俊

私が最初に安藤美文氏（金城町長）にお会いしたのは、信州松代で毎年行われる「真田まつり」の時である。

町長を含め多数の方々、遠く金城町からバスに揺られて十数時間、松代までお越しくださった。

祭りが終わると、すぐにお帰りになると言う。そのお話を伺った時には大変ありがたいことだと思ったが、正直なところ戸惑った。

「知音都市交流」に込められる時間・人員を含めた情熱は単なる町おこしの域を超えている、そう感じられたからである。しかし、ご著書『人生を舞う』の中に記されている「出会いが人生を豊かにする」の文字を拝読してこの疑問が氷解した。そのタイトルどおり「出会い」と「感動」を大切にされ、不可能を

可能にされてきた安藤氏だからこそ、この都市交流が十五年も続いているのだということを知った。

本書では石見神楽を愛し、大阪保存会の発足から祇園祭八坂神社での奉納公演を成功に導き、中国での公演を実現する壮大なストーリーが展開されている。そのスケールもさることながら、そこに展開されているのは安藤氏の「感動」に基づいた情熱と、人との「出会い」を大切にする姿勢に他ならない。だからこそ人の心を揺り動かし、地域を越えて言葉の壁を越えて交流の輪が広がるのであろう。

ぜひとも全国の皆さんにご愛読いただきたい書物である。

石川県山中町長

田中 實

安藤町長とは農都共生全国協議会を通じて知り合いました。自治体の長として持つ悩みや苦しみをお互いに話し合い、今後の町づくりの参考にしておりません。その温かい人柄と考え方に共感し、今日まで交流を重ねています。

折しも平成の大合併の渦の中、地域の独自性を持った町づくりを進める方策として、いち早く独創的な自治区制度の導入を打ち出されました。地域特性や伝統をどのように継続すべきか模索していた折、早速金城町を訪問させていただきました。

山あいに静かに広がる金城町は、「きんたの里」を初めとした温泉などの観光資源を生かした地域交流を積極的に展開しています。また、伝統芸能石見神楽の保存、継承、発信にも力を入れ、全国のみならず海外からも公演依頼がきています。これは豊かな人情味あふれる土地柄と、安藤町長の情熱あふれる町づ

くりの成果と確信しました。

わが山中町は石川県の南端に位置し、千三百年の歴史を持つ山中温泉と四百年の伝統を誇る山中漆器で知られる、山あいの自然豊かな町です。

伝統芸能山中節を全国に発信する拠点として温泉街の中心に山中座があります。名誉座長に女優の森光子先生をお迎えし、広く全国に知られる山中節や獅子踊りを観光客に味わっていただいております。山中漆器の技術の粋を結集してつくられたこの山中座で、平成十五年十一月に初めて石見神楽が披露されました。二回の公演とも会場に入りきれないほど多くの町民が詰めかけ大盛況となりました。

独特の軽快なリズム、ダイナミックな舞いと衣裳の豪華さなどに類を見ない石見神楽は、観る人に多くの感動と感激を与えてくれました。そして、再公演を希望する多くの声が寄せられ、平成十六年十一月に再公演の運びとなりました。この公演をとおして、両町民の交流の輪がさらに大きく広がることを期待しています。

安藤町長のことばのとおり、伝統芸能はその地域の子供から大人まですべての人の郷土愛を育て、地域の活性化の源となります。そして、これをとおして多くの出会いや交流が生まれ、そこから感動が生まれてきます。

人と人との出会いの大切さが書かれた本書が、全国の多くの方々に愛読されますことを心から願うものであります。

はじめに

私は「感動」という言葉が好きです。

その言葉にぴったりにあてはまるのが石見神楽です。

石見神楽は、見る人にとっても舞う人にとっても本当に楽しい世界です。

振り返ってみると、これまでの私は神楽を生きがいとしてがんばってきた、そんな気がしないでもありません。

私生まれ、そして育った島根県那賀郡金城町は昔ふうに言うならば、石見、山陰の山あいの小さな町です。

人口はおよそ五千二百人、観光と農業を組み合わせ地域おこしに取り組む町、こういうふうに申し上げると、全国どこにでもある町の風景となってしまうですが、特筆すべきところは町おこしや地域づくりにかける住民の情熱が大

変旺盛で、色々なグループがそれぞれの特色を發揮して素晴らしい活動を展開している元気な町であるということです。

そして、中国山脈のふところに抱かれた美しい自然と人情味あふれる町でもあります。

また明治、大正時代に活躍した「新劇の父」といわれる島村抱月や「チベツト探検の先駆者」として知られる能海^{のうみゆたか}寛の生誕の地でもあります。

そのようななかで、石見神楽の社中が十二もあり、いつもどこかでお囃子の笛、太鼓の音が響いているような町なのです。

古い歴史をもつ石見神楽は、もともと神事芸として受け継がれてきたのですが、明治のはじめ、担い手が神職から氏子に代わり、以来里神楽として盛んに舞われるようになり、いまでは郷土芸能として全国はもとより、海外にまで進出して好評を博すようになりました。

石見神楽の演目は「ちはやふる 玉のみすだれ巻き上げて 神楽の声を聞くぞうれしき」の歌ではじまる「鈴神楽」から、須佐^{すさ}之男命^{のおのみこと}が八岐^{やまた}の大蛇^{おろち}を退治

する「大蛇」^{おろち}のようなダイナミックでロマンに富んだ内容のものまで演目的にも豊富です。

神楽の囃子は、大太鼓、小太鼓、横笛、鐘で構成され、最初の神舞では神楽歌を歌いながら優雅に舞い、それに合わせてゆっくり囃します。

やがて鬼舞になり、戦いのクライマックスでは激しく太鼓を叩き、そのリズムに乗って舞い手は力強く動き回り、観客と一体となって興奮の渦を巻き起します。この迫力満点の舞いとアップテンポで囃し立てるリズム感は、明るく思い切りの良い石見人気質にピッタリで、地域活性化の柱となって文字通り町の人達を鼓舞してくれているのです。

いま、めざましく技術革新が進み、世の中が進歩するなか、郷土愛などといった言葉は消えかけていますが、私はこれからも躍動感のある石見神楽を愛しながら、感動する人生を送っていきたいと思っています。

その石見神楽をこよなく愛し、人生の励みとして歩み続けてきた私は、旧知の間柄である元NHKアナウンサー渡辺誠弥さんのすすめで平成三年に本を出

版しておりますが、今回は内容を大幅に変えて石見神楽とのかかわりのなかで
出合ったさまざまなことを人生模様として書かせていただきました。

私と石見神楽のかかわりは、ある意味で私の生き方、チャレンジ精神とかプ
ラス思考、あるいは人との出会いとか感動といったようなことを凝縮している
ように思われるからです。

そういった私のこれまでの人生のささやかな体験を知っていただき、少しで
も皆さまに共感していただければ、これにまさるよろこびはありません。

最後に、今回の出版にあたって写真の提供をしていただいた写真家の古川誠
さん、坂田英司さん、それに渡辺誠弥さんと文芸社編集部の方々に對し、心
からのお礼を申し上げたく思います。

それから、私をここまで大きく育ててくれたこれまでの人生で出会った多く
の方々、今は亡き父母、故郷金城の緑なる山河に深く感謝するものです。

平成十六年初秋

安藤 美文

細川さんとの出会い

昭和三十八年、私は生まれてから二十五回目の春を故郷の金城町で迎えた。会社の命令で求人活動をすませた私は、実家からバスで浜田市に出て国鉄の浜田駅案内所を訪れた。

「浜田で神楽の衣裳をつくっている人がおられるそうですが、紹介してもらえませんか」

と尋ねると、窓口にいた人の好きそうな駅員さんが、

「私も神楽やっとなるけえよう知つとるよ。松ヶ浦に細川さんちゆうて衣裳屋さんがあるけえ行ってみんさい。ところで、あんたどこからきんさったかな」

「大阪からです」

「へえー、大阪からかね」

不思議そうな顔をした駅員さんをあとに、私は急ぎ松ヶ浦に向かった。松ヶ浦は子供の頃に海水浴に行ったことはあるが、ずいぶん昔のことなので途中何度か道を尋ねながらやっと細川衣裳店にたどりついた。

応対に出た奥さんは、愛想のよい美しい人だった。

浜田駅からすでに電話連絡があつたらしく、さっそく座敷兼仕事場に通された。仕事場には五人の縫い子さんがいて、金糸銀糸のまばゆい神楽衣裳がところ狭しとならべられていた。

ご主人の細川勝三さんは金城町のとなり町、旭町今市出の気さくな人だった。私は初対面の挨拶もそこそこに、「実は」と本題を切り出した。

「実は、大阪でこちらの出身者ばかり集めて神楽の同好会をつくりたいのです。衣裳をはじめ何もなく、それで古い衣裳でも分けてもらえないかと思つてお邪魔しました」

と言う私を、細川さんはなかばあきれ顔で見ている。

しかし、話というものは通じるものだ。若気のいたりとか裸でぶつかると

私のお話を快諾してくれたのだった。

「どうやら本気でやりんさるらしい。郷土のためにもええことだけえ協力させてもらいましょう」

と言つて古い衣裳を三点ほど出された。

「安サラーマンで金がないのですが」

「だったら二万円ほどもらやあええけえ」

と言つて風呂敷に包んでくれた。

細川さんは石見神楽の研究者として知られ、石見神楽の普及振興に貢献されたばかりでなく、衣裳を単なる染めぬきから今日のような刺繍のきらびやかな舞い衣裳にと変えた功労者であった。

その日をはじめりとして私は細川さんに神楽についてどれだけ教えられたとか。帰郷するたびに訪ね、のちにUターンしてからはさらに足繁く訪ね、石見神楽の歴史などについて詳しく聞くことができた。

細川さんの神楽談義は神楽の舞いと同じで熱があり、リズムがあり、躍動的

細川さんとの出会い



仕事場の細川史子さん
三十三演目の舞いがあるという石見神楽。その衣裳づくりに打ち込む。自らデザインし
一針一針に丹精をこめていく。

だったことを憶えている。憶えている、というのは昭和四十五年の冬、交通事故のため不帰の人となってしまわれたからだ。惜しいことだった。本当に惜しい人だった。神楽の盛らないまの姿を見せてあげたかった。

そのあとは、奥さんの史子さんが亡きご主人の遺志を継いで、女手ひとつで神楽衣裳の保存と発展のためにがんばってこられた。文字通りの細腕繁盛記で、後日談になる

が、関西テレビ制作、桂米朝司会の「ハイ！ 土曜日です」で縫い子さんとともに全国に紹介され、大きな反響を呼んだ。

ともあれ、細川さんに分けていただいた貴重な衣裳を手にして、私は喜び勇んで大阪へと向かったのだった。

大阪保存会の発足

大学を卒業した私は、大阪市東成区に本社のある平和金属工業株式会社に就職していた。はじめの頃の仕事は、いまふうに言えばリクルーターということになる。

当時は好景気ということもあってどこでも人手不足で、中学校を卒業して都会に働きに出る人は金の卵であった。求人担当の私は地縁をたよりに石見を中心に中学校回りや職業安定所通いをして求人活動に精を出していた。これは、い

まだからお話しできることなのだが、そうした求人活動で帰郷するたびに細川さんの家を訪ねては神楽談義に耳をかたむけ、今夜どこどこで神楽舞があると聞けば出かけて朝まで見物して大阪に帰る、というような生活をくり返していた。

神楽舞の道や所作はとてむずかしく簡単におぼえられるものではなかったが、目の前の舞いの一挙手一投足を見のがさず、囃子のリズムを頭のなかに叩き込んでいこうと必死だった。

その頃、私にはひとつの夢があった。それは躍動するリズム感、ダイナミックな舞い、この素晴らしい石見神楽をなんとか都会の人に見てもらいたいという一途な願いである。そして、この夢の実現のために情熱を燃やしていた。

その頃の大阪の郷土芸能といえは、盆踊りのときの「河内音頭」か秋祭りの「だんじり」しかなく、なんとも寂しい思いがしていた。

当時私が住んでいた大阪市東成区に八王子神社という古いお社があった。あるとき、そのの氏子青年会の会合で私が郷里の石見神楽の話をしたところ、ぜ

ひ一度見たいという話になった。ところがご存じのように石見神楽は伊勢の大
神楽のように二、三人でできるものではない。まして遠い島根から大阪まで来
てもらっただけでも大変だ。

金はない、見せてあげたいとそんな思いが交錯するなかで、ならばいっその
こと大阪に神楽の社中をつくってしまおうという思いが浮かんだ（これは石見
神楽の大阪保存会結成の遠因として書き落としてはいけないことなのだが、郷
里から働きに出てきていて年に一度の秋祭りに帰省できない島根県出身の人達
にも見せてあげたいということがあった）。

故郷を離れて働く人達に故郷の勇壮な神楽舞を見てもらうことで、大都会で
勇気をもって働いてほしいと思っただけだった。

それは企業の求人担当としての責務ということもあったが、それ以上に高校
三年、大学四年と故郷を離れて暮らしたなかで、心に残る神楽囃子の響きにど
れほど励まされたことかという気持ちがあったからだ。

余談だが、私の神楽好きは母方の血にもよるらしい。母は三隅町の医家南薫

堂医院栗山家の出だった。栗山の伯父は大の神楽好きで、暇さえあれば近所の神楽好きの人といっしょになって太鼓を叩くことを楽しみにしているような人だった。

私の記憶のなかの母は門徒数の少ない寺の坊守として小さな田圃を耕し、山羊の乳を搾り、芋粥を炊いて八人の子供を育てたという苦労の連続の姿が焼きついている。

八人の子供が全部義務教育を終えたとき、母の齒はほとんど抜けてなくなっていた。

そんな母の姿を見て、私のすぐ下の妹は「私が働いてお母さんの齒を入れてあげる」といって高校に進学せず、中学校を卒業するとすぐに東京に出て昼間働きながら夜間の美容学校に通い、現在は松江で美容サロンを経営するまでになっている。

私はというと、当然のことながら父母に迷惑をかけられないので自分で働きながら夜間の大学を卒業し、卒業と同時に平和金属工業に就職したのである。

ここで話を本筋にもどすが、前述のように求人担当として就職のお世話をした人達に呼びかけて石見神楽の大阪保存会を結成したのは、昭和三十八年のことだった。発足当初は人数も少なく、金城町小国の榎靖博君、今福の河本順良君等たった四人での旗上げだった。

細川さんに譲ってもらった衣裳で道具もなんとか揃えることができた。笛は古いものだが私が持っていた。大太鼓は使い古したものを買った。さいわいなことに、当時はまだ郷土芸能がそれほど盛んでなかったこともあって、大阪浪速区にあった「太鼓政」という太鼓屋さんには古い太鼓がゴロゴロしていた。このあと宮田輝さんが司会する「ふるさとの歌まつり」が始まり、郷土芸能ブームに火がついて古い太鼓もだいぶ値上がりしたということで、よい時期に手に入れることができたと思っている。

しかし、肝心の大蛇の頭と蛇胴がなかった。が、これも体当たりでと心に決めていた。求人活動で帰郷した折、かねて名前を聞いていた浜田市熱田町の植田晃二さんを訪ねた。



子供神楽

植田さんは自分で道具を工夫し、苦勞の末に蛇頭や蛇胴のつくり方を確立した人である。神楽への思い入れの深さ、苦勞人のゆえか私の話をすぐに理解してくれ、古い蛇頭と蛇胴一对を安くゆずってくれた。

見まわせば仲間三人と古道具という寂しい風景だったが、細川さんや植田さんの厚意と会員の熱い思いは、これから先の保存会に対する不安を溶かしてくれた。

事実、細々ながら動き出すと、人づてに話を聞いて入会を申し込む人が一人二人と出てきて嬉しかった。

まず浜田市横山町出身の金口久雄さんが申し込んできた。金口さんは三度の飯より神楽が好きという人で、田舎にいたとき

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

安藤 美文 (あんどう よしふみ)

1938年7月、鳥根県金城町に生まれる。

大学卒業後、就職先の大阪で石見神楽の同好会を結成し、求めに応じて各地で公演活動をする。

その後、帰郷して1973年、電子会社を設立（現在会長）。

1992年9月、金城町長に当選（現在4期目）。

観光と農業を中心とした町づくりをめざす。分けても神楽を町おこしの柱に据え、国内のみならず海外にも進出するなど石見神楽の普及振興に尽くしている。

人生を舞う 出会いが人生を豊かにする

2005年2月15日 電子出版発行

著者 安藤 美文

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (営業)

<http://www.boon-gate.com>

© Yoshifumi Ando 2005 Corded in Japan

ISBN4-8355-7862-7 C0095

JASRAC (出) 0413408-401

(文芸社発行の通常書籍 (紙の本) については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト <http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)